

常磐

TOKIWA

vol. 8

Mar. 2007



 TOKIWA

表紙説明

常磐大学 学生ホール棟

通称T棟(1999年6月竣工)。地下2階地上2階建て延床面積2,217㎡のこの建物は、竣工時、地下2階には柔剣道場、地下1階に教員の談話室、アスレチックルーム、1階、2階が食堂兼ホールとなっていた。この1、2階の部分が棟名の由来であり、設備的には舞台、マイク設備、プロジェクターにスクリーンが整備されている。また、周囲にはLANの情報コンセントがあり、インターネットに接続できる環境になっている。

2006年度の「機構改革」により、学生課、教務課、就職課機能を整理統合した「学生支援センター」ができたため、地下1階部分に、直接学生と対応する窓口である「学生支援センター」を移した。



イラストレーター／佐々木悟郎

常磐 TOKIWA
Mar. 2007
vol.8

発行日 2007年3月
発行 学校法人常磐大学
編集 常磐大学 企画広報課

〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1
Tel.029-232-2511 (代)
<http://www.tokiwa.ac.jp/>

CONTENTS

- 1 特集 座談会録
～進化していくトキワのキャリア支援・キャリア教育～
**今、求められる
キャリア支援とは何か。**
- 9 教員エッセイ
教員から寄せられた研究分野の魅力や逸話を紹介
- 12 Close Up Tokiwa **施設紹介**
「諸澤みよ記念館」
- 15 キャンパスレポート
学生生活の中から寄せられた声を紹介
- 16 Tokiwa News
常磐大学高校、常磐大学幼稚園から届いた最新ニュースを紹介


ANNIVERSARY
学校法人常磐大学は2009年に
開学100周年を迎えます


40th
TOKIWA
JUNIOR COLLEGE

2009年に迎える学校法人常磐大学の開学
100周年と今年度迎えた常磐短期大学の創立
40周年を記念し、ロゴマークを作成しました。

出席者(右から)
 柄澤 行雄 常磐大学 副学長 <司会>
 原山 美之 株式会社水戸京成百貨店 専務取締役
 高木 勇夫 常磐大学・常磐短期大学 学長
 寺門 一義 株式会社常陽銀行 常務取締役
 竹中 治利 常磐短期大学 副学長
 国見 太 常磐大学・常磐短期大学
 学生支援センター 統括

インターネットの普及の中身も、
 大学側と企業側でもっと
 研究していく必要があるのでは。

学生が自分の適性にあつた
 職業に就けるようにするための
 教育の内容が問われるところ。

社会や地域に貢献できる人材を
 養成する、ということでは本学では
 教育の目的としていきたい。

入社して何年か経った卒業生を
 大学に派遣して、現実的な
 働く楽しさを伝えるのも一案。

短大の場合には、わずか2年で
 現場で通用する人材を
 育てなくてはならない宿命がある。

最終的には個人の資質が
 左右するので、個々の適性を見て
 伸ばしていくような教育が必要。



特集 | 座談会録
 進化していくトキワの
 キャリア支援・キャリア教育

今、求められる キャリア支援 とは何か。

ここ数年、全国の教育機関でも急速に浮上してきた「キャリア支援」「キャリア教育」という言葉。学生の「将来の理想の姿」の実現に向けて、学校が段階的に様々な支援をするもので、従来の就職支援の枠組みよりも、さらに広く直接的なサポートをしています。

常磐大学・常磐短期大学でも2006年9月、教学事務機構を改編し、「学生支援センター」を開設。キャリア支援担当が学生の就職支援を行うと共に、カリキュラムにもキャリア教育の科目を取り入れていきます。そういった流れの中で、

本学のキャリア支援をより良いものにするために、何が必要なか、何が求められているのかを、企業の方をお招きして、送り出す大学と受け入れる企業、双方の立場から語っていただきました。



キャリア支援の 背景にあるものと、その現状。

柄澤 本日は、常磐大学と常磐短期大学のキャリア支援についての取り組みに対して、ご意見を伺いたいと思っておりますが、お話を伺う前に、その背景や経緯などについて、私のほうから少しお話させていただきます。

1990年代に入り、当時の文部省が大学の設置基準を大幅に緩めました。それまではきめ細かな設置基準に従って大学は運営されてきましたが、それが緩められ、大学の自己責任で各々の大学を運営していくということになったのです。そういう中で各大学も様々な改革を進めてきたわけですが、その過程で欧米の動きに習いながら、日本でも大学の質の保証ということが言われるようになりまして。この保証の中身は様々ですが、とりわけ卒業していく学生の質を保証するということが、大学の役割として非常に大きく求められ、またそれに対する大学の責任というものも問われるようになってきたわけです。ですから各大学で卒業生の質を保証するという試みもいろいろな形で行われてきて、そういった背景からここ数

年来、「キャリア形成」とか「キャリア教育」という用語が使われるようになってきたと思っんですね。本学でも入学前、在学中、卒業後と大学が一人ひとりの学生たちにどういふふうに関わりをしていけるのか、と言うことを考えながら取り組んでいこうとしています。その一環として、これまで学生に関わる業務を担当していた教務部や学生部、就職部をまとめ、「学生支援センター」という機構に統一しました。中でもこれまで学生の就職を主に扱ってきた就職部を、「キャリア支援」という部署に名称を変えまして、入学前から卒業後までの一貫した学生支援ができるような体制を組織上作って、取り組もうとしているわけです。

今回はそうした本学の姿勢をご理解頂き、学外の方々からいろいろなお示唆を頂ければと思っております。どうぞよろしくお願いたします。まず最初に高木学長から、本学のキャリア支援・キャリア教育のために、こういったことを行っているのか、ということを紹介頂きます。



常磐短期大学 副学長
竹中 治利

武蔵野音楽大学専攻科声楽専攻修了。専門：声楽。二期会、日伊音楽協会、日本ワーグナー協会会員。2005年4月より現職。



常磐大学・常磐短期大学
学生支援センター 統括
国見 太

広報課、学生課、就職課の各課長を経て、2005年4月より就職部長、2006年9月より学生支援センター統括。

短大と学生支援センター、各立場での取り組み。

柄澤 今、高木学長から説明しましたような方針で大学全体で取り組んでいるわけですが、実は常磐の場合、学生の教育に関しては四大よりも短大のほうが一歩も二歩も先に行っている状況です。そこで、少し具体的に短大の状況を竹中副学長からお話を頂きます。

竹中 短期大学というのは、もともと開学当時から2年間で世の中の役に立つ女子を育てたいという志がありました。ですから目的を持った学科が多く、和裁洋裁ができてその技術が社会にも役に立つ家政科家政専攻と栄養士を目指す食物栄養専攻がはじめにでき、やがて、保育士を目指す幼児教育科ができています。これらの

現場の特徴ですが、卒業したばかりだから最初は見習いでいいですよ、という社会ではありません。高校を卒業してたった2年でいきなり任せられるわけですから、そのことを目標にやってきました。

ただ、1990年以前は短期大学も高等教育ということで教養学科というのがありまして、あらゆる分野に亘って高い教養を持つて社会に受け入れてもらうという学科がありました。しかし時代が変わり、コンピュータが導入されると、その技術をすぐ会社で使えるような人材が欲しいというニーズが出てきて、本学も経営情報学科を作りました。ところが何年か過ぎますと、そのニーズも変化してしまいました。そこで短期大学が

応じていた段階から、もはやそういうことが不可能になつてきた状況が出てきたんだと思います。

2005年4月に学長に就任にしまして、学内改革を推進していく中で、大学としての広報の在り方が非常に手薄だと感じまして、大学のPRの一つとして「常磐マニフェスト」というものを作成いたしました。この冊子の中に教育目標チャート図というのがあります。人材育成をモノの生産に例えますと、原料を入れて製品を作つて社会に出していくという生産現場でよく使われるインプット、スループット、アウトプットという言葉で表現しています。大半の学生が最後に身を置く教育機関は短大・大学です。ですから社会の負託に応えるためにも、きちんとした人材を育成しなければと考え、教育目的として、社会貢献と地域貢献を、そして教育目標として社会適応力と社会活動力を掲げ、社会適応力を基礎能力、社会活動力を応用能力としようように捉え、これを在学中に身につけてもらおうと考えました。もちろん社会活動力はかなり応用的なものですので、パーフェクトにこれが身につくというわけではありません。しかし社会に出ていく時に入り口の部分を知っている

か知っていないか、それだけで随分違うのではないかと思っています。

それで基礎能力は何かと申しますと、マニフェストの中に書かれている、読む・聴く・調べる・整理する・考える・書く・話す・まとめる・伝えるという9つの力です。昨今、若い人が活字を読まなくなり読む力が低下したと言われますが、読む力は単に読むだけでなく、読む中で物事を整理して考えていく、そして書かれていた内容をまとめて伝えていく、ということにつながっています。ですから、この力は徹底的に身につけさせていきたいと思っております。そしてそれをベースに应用能力として、企画力・構想力・創造力、分析力・判断力・洞察力、時間管理能力・協働力・調整力といった力を身につけることで問題解決力や意思決定力を培っていけるだろうと考えております。

常磐大学・常磐短期大学 学長
高木 勇夫

日本大学大学院理工学研究科博士課程修了。専門：地理学、自然環境論、地域政策、計画論。日本地理学会、人文地理学会、デジタルアース日本学会会員。2005年4月より現職。



考えたのが、教養と実際に世の中に役立つスキルを身につけさせて、とくに地元の産業にお役に立てる学生を育てるといふ、キャリア教育学科でした。すべての教員が短大を出る学生の能力と、地元の産業が何を求めているのか、といったことを相当研究いたしました。その時設けた科目の中で今もある

「キャリア形成基礎演習」「キャリアガイダンスⅠ・Ⅱ」は、さきほどお話に出たマニフェストの中の9つの力がしっかりと組み入れられた科目です。これらによつてインターシップ、そして地元の産業へと結びつけることができ、ある程度の信頼を得ることもできまして、キャリア教育をどう社会に生かすかという課題も、少しずついい

方向に向かっているように感じています。

柄澤 大学と短大においての教育の面でのお話を頂きましたが、これまで就職部長として具体的に学生を就職に結びつけていく仕事をしていたら、学生支援センター統括の国見さんから補足的なお話を頂ければと思います。

国見 学生支援センターになりました。低学年からキャリア支援をしていかななくてはならないという課題があるわけですが、従来の就職支援においても3年生から本格的な対策をいろいろ練つてきております。3年生の春から「就職ガイダンスⅠ」として、その年の卒業生の実績報告、自己分析を含めた適性検査等を行い、9月

教育目標チャート図(内容)





株式会社常陽銀行 常務取締役
寺門 一義氏

1974年4月 株式会社常陽銀行入行。1996年6月 多賀支店長。1998年7月 営業統括部副部長。2000年7月 個人事業部副部長。2001年6月 個人事業部長。2002年6月 経営企画部長。2003年6月 執行役員経営企画部長。2005年6月 常務取締役。

企業から見る、社会に通用する力とは何か。

柄澤 大学のキャリア支援について一通り説明がありました。こういった大学の取り組みに対して、企業の方から見てどのように感じられているのか、ということを感じたいのですが、今日おいで頂いた京成百貨店様も常陽銀行様も、これまで大学の卒業生をたくさん受け入れて頂いていますから、ある程度大学の卒業生についてもご存じかと思えますので、それらを含めて受け入れる立場からご覧になって、社会に通用する力とはどういうものなのか、また何が備わっていれば学生が就職してからきちんとした仕事を続けていけるのか、という辺りのお話をま

したが、素晴らしい取り組みをなされていると感じております。私も毎年春に就職説明会を開催させて頂いて頂いて、毎回その中で私から学生の皆さんに申し上げていますのは、企業理念というものについてです。当社がどういった目的で会社が成り立っているのか等について話させて頂いて、その中で共感や理解を示して頂ける方を基本的には採用させて頂いて頂いています。企業理念については非常に概念的な部分があるのですけれども、その企業理念を私共従業員の日常の行動に反映させた企業行動方針というものを作成しております。そこには5つの基準が書かれています。まず一番目は、私たちはお客様

の立場で考え、行動します、というもの。二番目は、私たちはお互いを認め合い、協力します。三番目は私たちは公正な企業倫理を重んじ、社会の一員として行動します。四番目は、私たちは自らの責任で主体的に行動します。五番目に、私たちは創造と確信に挑戦します。というもので、私共が求める従業員像がここに現れていて、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、問題解決能力、創造力など、さきほど学校側からのお話にあつた部分がすべて含まれていますから、そのまま実践で生かして頂ければ、非常にありがたいと考えているわけです。

と重複する部分はかなりあります。これは学生に対する期待だけでなく、行員全体に対する期待でもあります。自分でものを考えて、自分で行動し、自分で律する、というこの二文字を書いて「自律」というものを持った人間であることを強く求めております。この自律という言葉は、自分でものを考えて、自分で行動し、自分で律する、もしくは組織に役に立つ動き方をし、かつ決して諦めない、という意味を総称したものです。企業の組織活動の中ではいろいろな問題課題があり、それに対しての答えが一つである、ということはないのですが、社会の中ではこのことが最も大事なものであると思うんですね。与えられた環

境や要件の中で、どのような対応策を生み出していかかというところは、自分自身がきちんとしたものの考え方をしていく中で初めて生まれるものです。社会人と学生の最大の違いというのは、知っていることをどう実行し、成果に結びつけていくかというところだと思います。そういう意味で実践というものは非常に大事です。問題意識を持っていくつかの仮説を立て、その仮説を実行していく中で当初の問題意識が果たして正しかったのかどうかを検証し、改善できるところを見つけたら、よく言われるPDCAサイクル(Plan-Do-Check-Act)の考え方が、我々はこれを思考検証という言い方をしています。そういったサイクルが回せるような人間を期待しています。

キルを持つてで上がるのかというところ、さきほどのマニフェストに書かれている基礎能力で求められる9つの力に、実践というものが加わるのかなと考えます。さらに、自律のレベルがどのようにステップアップしていくのかというところで、応用能力がこれを支えていくのではないかと思います。そしてもう一つつけ加えさせて頂きたいのが、コンプライアンスという、私共が非常に重要視しているものです。これは日本語に訳して法令遵守とすると、極めて狭い範囲でしか物事が理解されませんから、さきほど国見さんがおっしゃった、きちんと挨拶するマナーのような良き社会人として人や社会に受け入れられる初歩的なことまでも、コンプライアンスという言葉に含めて考えていくようにしています。

株式会社水戸京成百貨店 専務取締役 原山 美之氏

1968年4月 京成電鉄株式会社入社。
1999年10月 京成不動産株式会社常務取締役(出向)。2001年6月 京成バラ園芸株式会社専務取締役(出向)。2004年5月 株式会社水戸京成百貨店専務取締役。



学問の世界と実践の世界との見えないギャップ。

柄澤 今、寺門さんから実践という言葉がありまして思い当たりましたが、昨年の春、私のゼミから2名の学生を採用して頂きまして、その学生たちが夏休み前に集まった時の話です。4月に一緒に配属されて3カ月間は湯沸かし場で泣いたと言っています。最初の頃は大学と職場とのギャップというものは、かなりのものがあるんですね。そのギャップというものが我々にはなかなかわからない部分です。就職試験のための指導はしますが、入社して職場に出るからの心構えはどうしたらいいのか、という継続的なキャリアとしての教育や支援が大学の中

では不十分なところがあるように思います。キャリア支援という言葉、大学は一つの行為として考えた場合、大学は何をしなければならぬのか、また大学に対して企業からどういうことを求められるのか、ということについてお話を伺えればと思います。

高木 直接には関係していませんけれども、さきほど寺門さんがおっしゃっていた、解は多様である、ということですね。今の大学生は高校まで偏差値教育を受けてきて、解は一つだと信じ込んでいるところがあるような気がします。私は視点・視野・視座

ということをよく言うのですが、



常磐大学 副学長
柄澤 行雄(司会)

慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門:社会学。日本社会学会、日本村落研究学会、地域社会学协会会员。2005年4月より現職。

どういう所に焦点を合わせるのかという視点と、どういう位置から物を見るのかという視野、どういう立場から対象を見るのかという視座、それによって見えてくるものが全部違うんですね。そういったことを教育で理解させていくことで、司会のほうからあった現場でのキャリアとうまくリンクしていく部分があるのではと考えています。また先生方自身が、企業の現場の厳しい経験を持つておられない方だと、表面的な言葉だけになってしまいがちで、なかなか難しいところがありますので、そういう点からも、企業の方々と教育の場で双方向で協力し合えたらと思っています。

における実践の基礎能力というのは、人間関係をいかにスムーズにさせていくことができるか、自分がやりたい事に対して他の協力をどう得られるか、いかにストレスやプレッシャーに打ち勝つか、ということではあるのではないかと思います。

原山 そう言う点で、百貨店業は接客が基本ですが、お客様も一人一人お考えが違うわけで、販売員が同じように接しても反応がまったく違うことがあります。なぜそうなるのかという回答は、学問の世界の回答が一つしかない部分と、実践では百通りあるというところで、ある程度時間をかけないと見つけられないものだと思います。我慢強さも必要だと思います。

インターンシップの有効性と、それに代わるもの。

柄澤 皆様のお話を伺っています、学生に必要なものがある程度はつきりしてきたかなと思います。社会から学生が求められる力を身につける方策としては、9つの力の他に、インターンシップという試みもあります。短大でも四大でも行われて、それなり

の成果もあるようですが。
原山 その重要性については理解はしていますが、私共も毎年学生さんを受け入れさせて頂いていますが、これまでの実績では期間が3日間ととても短いということで、こちらまでできるだけ社員が多いゆとりのある配属場所を考

えています、学生さんの側でよほどの意識を持って取り組んで頂かないと難しいかなというのが実感です。通常の授業やゼミでも、以前小川教授の「サービス産業論」の授業の中で、私共の京成百貨店を研究課題としてやられたことがありましたように、学問と実践が近づいた捉え方をもう少し増やされたほうがいいのではと考えています。これは理論と現場のギャップを埋めるためにも役立つのではという気がしています。

ば、まず「働く」ということの意味を学生の方にとことん話をするといいことが、意義のあることだと思っています。そして、せっかく就職しても短期間で辞められてしまう方がいます。卒業生の方との対談など、抱いていたイメージを現実のものとして近づける工夫をし、哀しい思いを極力少なくさせるということも意義のあることだと思っています。

寺門 確かに企業の実感を体感するところが狙いだとしても、なかなかそこまでの経験は難しいと思います。とくに最近私共は銀行業ではなく金融サービス業ということで、お客様に提案をし、「役に立った」と言われた時に、初めて銀行員の喜びを体感できるわけです。さらにお客様の守秘義務もありますので、インターンシップで差し障りのない雑用に近いような仕事をお願いすることにになり、逆に金融サービス業というものに対して誤解を与えてしまう危険性もあるわけです。ですから、これに代わるものとして何かがあるか、というところを模索したほうが話は早いのではないかと考えています。

キャリア教育ということでは



就職支援年間スケジュール

3月	2月	1月	12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月
<p>内定者アドバイザーによる就職相談</p>	<p>就職セミナーⅣ (業界会社研究のポイント、会社説明会の回り方)</p> <p>就職支援バスツアー</p>	<p>就職セミナーⅤ (就職試験実践講座)</p> <p>企業就職試験対策講座 (人物試験対策・面接・履歴書・エントリーシートの書き方・マナー講座)</p>	<p>就職セミナーⅥ (就職試験実践講座)</p> <p>企業就職試験対策講座 (人物試験対策・面接・履歴書・エントリーシートの書き方・マナー講座)</p>	<p>就職セミナーⅢ(業界研究)</p> <p>エントリーシート攻略テスト (履歴書・エントリーシート講座)</p> <p>公務員ガイダンス</p>	<p>就職セミナーⅡ(就職活動のマナー)</p>	<p>企業就職試験対策講座 (筆記試験対策・一般教養・SPI・時事問題)</p> <p>就職ガイダンスⅡ (学生支援センターの利用について、就職活動ガイドブック就職体験記配布)</p>	<p>公務員試験対策講座</p>	<p>就職セミナーⅠ(就職活動の基本と準備)</p> <p>就職適性検査(自己分析講座)</p>	<p>就職ガイダンスⅠ (就職活動の実態と対策、進路登録カードの配布)</p>	<p>卒業生との懇談会</p>	<p>新年度ガイダンス</p> <p>公務員ガイダンス</p>



企業人事担当者による学内会社説明会

多種多様な業界・企業の方を招き、業界の動向や今後の成長性、各企業の特徴や採用者の人物像など、就職最前線の情報を得ることができま。 (2~10月まで年間10回)



就職支援バスツアー

就職に対する意識を高め、同時に企業研究を実践する「就職支援バスツアー」を企画・実施しています。バスの車内では就職活動についてのレクチャーを受けたりビデオを鑑賞。首都圏企業個別ブースを訪れ、企業概要などの説明を受けます。

企業人事担当者による学内会社説明会

公務員試験対策講座

企業人事担当者による学内会社説明会

趣味に生きる



常盤大学高等学校 教諭
山岸健一
常盤大学高校地理歴史・公民科担当教諭。東北大学文学部史学科東洋史専攻卒業。

アマチュアという言葉は「愛する」という意味のラテン語・フランス語から派生した語である。だからアマチュアは常に上達しようという意識を持ち続けなくてはならない。そのことを学生時代に芥川也寸志の指揮でベートーヴェンの第九を歌ったときに言われたことを、私は今でもよく覚えている。

趣味とは「アマチュアとしての活動」であると私は思う。だから単にバスカルの言う所の「気晴らし」程度にしかやっていないことを趣味と言うのはどうもはばかられる。ホイジンガの言う「ホモ・ルーデンス」よろしく、ひたすら「生きていく上でたいして役に立ちそうにないこと」に熱中して活動することこそが趣味なのではないか。

「役に立つ」云々に関連して。この原稿を書いている最中に、多くの高校で必修教科目を履修させていないことが大問題となった。もちろんそのようなカリキュラムを組んだ学校に責任がある。しかしその背景には、社会全体に「学校は役に立つ

ことを教えるべきだ」という誤った考え方があつたことを私は指摘したい。私は年度初めの授業の際にこのように宣言している。「学校で習う教科全ても役に立つような人生なんてあり得ないだろ！役に立たせるかどうかは一人一人の問題であつて、我々にはそれが役に立つことを保証する義務はない」と。

やはり教員一人一人が、もっと自分の教える科目に対して「これは人類文化の伝承なんだ」というプライドを持たないといけない。それがなければ「受験のために」などという現世利益の前に屈服してしまうのだ。

話を戻して本題に移る。本題は、私が如何に「趣味に生きる」人間であるか、その一端の紹介である。

私が自分のウェブサイトを公開し始めたのは九九八年のことである。学生時代からの趣味であるクラシック音楽について、自分が聴いてきたCDの情報ジャンル別・曲ごとにま

とめてみれば、かなりのものになるのではないかと考えたのである。実際、私のサイトはアマチュアの作るクラシック音楽関連のものとしてはかなりのアクセス数を誇るものになっている。私がCDに費やしたカネと時間を考えれば当然の結果である。

考えてみると、高校の社会科の教師というのは、趣味として何をやって、結果的に教材研究の仕事の足しになってしまふという、大変オトクな職業だと思ふ。

クラシック音楽をとことん聴くことは「世界史」の西洋文化史研究だし、近藤誠氏のガン関連の本や田川建三氏の聖書学の本も「倫理」の教材研究になるし、はたまたビートルズを全部聞くことはその両方になる。(ビートルズは「倫理」の教科書に若者文化の代表として載っている。)

CDを聴き、本を読み、サイトを充実させる。典型的インドア派の間違った私に転機が訪れたのは二年前のことである。十年以上ぶりに車

を買って換えてからは、ドライブが楽しくなり、それで何となく「城めぐり」をするようになったのだ。

ところで、いったんあることを趣味にしようと思つると、私はまず対象の全体像を一気に把握しようとする。と書けばかっこいいが、実際はちょっと高級なコレクター癖が一気に頭をもたげると言うべきか。

そんなわけで、私は城めぐりに必須と思われる書籍を一気に買い集め勉強した。現在、江戸時代建造の天守が残っているのは十二カ所。うち世界遺産の姫路城を含む四つが国宝、残りが重要文化財指定である。その他、天守はなくとも、門や櫓が重文指定の所は結構ある。これをコツコツと城攻めしていく、というのは日本全国を旅行してまわるのに格好のテーマではないか。

実は、私は社会科の教師だということに、まだ鎌倉に行ったことがない。学生時代は仙台で四年間過ごしたのに平泉にも行っていない。そのくらい出不清な人間だった私が、一転して、

週末ごとに車を飛ばして「城攻め」に行くようになるとは、自分でも思ってもみなかった。

それまで自分で「旅行に行くぞ」と決心して旅行をしたのは、ここに勤務して二年目の夏休みにミュンヘン・ザルツブルク他の音楽祭ツアーに参加したときである。それぐらい「旅行」は私の趣味ではなかった。連休や夏休みに、「渋滞何十キロ」などというニュースを見ると、あんな所に突つ込

むなんてアホじゃなかるか、と思つていた。

今でも渋滞は御免被りたいので、たとえば朝二時に水戸発、常磐・東名・名神を飛ばして午後二時すぎに姫路着、そのまま城攻め、などというもつとアホなことをやっている。(城攻めには愛車で行く、というのがもう一つのこだわりなので。)

城では、ひたすら写真を撮りまくる。しかも城門一カ所を表と裏から

何枚も撮るのだから、城一つにつき何百枚にもなる。私はフィルム式のカメラは扱わない。デジカメ時代になって初めて写真を撮るようになった。これも最近の私の大きな変化である。撮った写真は新しく立ち上げた「城めぐり」のサイトに掲載する。このサイトもクラシック音楽のサイト並みに「二番」を目指したいが、この分野はライバルが多くて難しいところである。



【クラシック音楽サイト】
<http://classic.music.coocan.jp/>
【城めぐりのサイト】
<http://shiro.travel.coocan.jp/> (上写真)



姫路城(兵庫県姫路市)
左端が乾小天守、その手前が西小天守、右が大天守。その向こうの陰に東小天守がある。大天守と3つの小天守が口の字型につながっているので連立式天守という。格調の高さ・美しさはさすが国宝・世界文化遺産だけのことはある。



松江城(鳥根県松江市)
天守の手前に付櫓が接続しそこから中に入る複合式天守。現存天守のうちでは姫路城に次ぐ大きさである。重文指定。豊臣系の城の特徴である黒い下見板張りの壁は、白漆喰の壁よりも雨に強く長持ちするらしい。



備中松山城(岡山県高梁市)
二の丸から本丸を見る。右奥が重文指定の天守、手前は最近復元された櫓と門。標高430mの山頂に立つ山城で、麓に城下町が広がっている。この日は台風に刺激された梅雨前線が活発になるという予報だったが、なんとか小雨程度ですんで助かった。



宇和島城(愛媛県宇和島市)
市内にある独立丘陵を利用した城である。天守は重文指定。台風10号の直撃を受けたが、ずぶ濡れ覚悟で山登り。しかし天守前では奇跡的に雨が止んでじっくり撮影できた。



松本城(長野県松本市)
中央の大天守は右の乾小天守とは渡櫓で連結し、左の辰巳小天守およびその手前の月見櫓とは直接接続する。全国でもここだけの複合連結式天守(国宝)である。写真の向こう側は水堀に面している。

常磐大学とFD (ファカルティ・デベロップメント)

大学審議会は、1998年10月26日の答申「21世紀の大学像と今後の改善方策について」競争的環境の中で個性が輝く大学」のなかで、「教員の教育内容・授業方法の不断の改善のため、全学的あるいは学部・学科全体で、それぞれの大学の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修(ファカルティ・デベロップメント)を実施することが重要になつてい」と述べています。

このファカルティ・デベロップメント(Faculty Development)のことは、本来「教授団の資質開発」研究機能の開発、教育機能の開発、教員人事機能の適正化、管理運営機能の開発」を意味するものと思われすが、わが国では、「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称」(中央教育審議会大学分科会)とされ、大学設置基準にも同様の規定が置かれています。

今では多くの大学でこのような意味でのFDが実施されています。しかし、本学では、これまでFDは実施されていませんでした。勿論、授業内容・方法改善の努力・工夫を多くの教員が個人レベルで行っていましたが、それでは充分とは言えません。

これからは、授業改善に組織的に取り組み、大学全体で教育力を向上してゆくことが求められているのです。

本学では、2005年4月に高木(学長)新体制が発足すると、学長の指揮の下に大学改革プロジェクトが開始し、その中にFDを検討するワーキンググループも作られました。2006年4月にはこれが大学FD委員会に改編され、ここで全学的なFDの実施を検討してきました。その結果、夏休みの後半9月に、第1回常磐大学FDフォーラム「大学の授業を考える」を開催することになりました。

フォーラムは、教員約70名、学生約90名、職員約10名の計約170名が参加し、第1部、早稲田大学教育総合科学学術院、三尾忠男教授(大学授業研究)の講演「大学の授業を考える」いままぜFDか、第2部、三尾教授をまじえて各学部代表教員・学生各3名によるフォーラム(シンポジウム)、第3部、学生各10名をまじえて学科単位の話し合い(分科会)、第4部、各分科会からの報告、学部長のコメントという構成で実施されました。

フォーラム全体を通じて、授業改善の実践例、学生から見た望ましい

授業例などが示され、授業改善の方向性について話し合われました。FDは教職員を中心に行われるのが一般的ですが、本フォーラムでは学生にも参加してもらいました。授業は教員だけが行うものではなく学生も参加して協働して作って行くものと考えているならば、学生にもFDへの参加を求めるのは当然のことであり、実際学生に参加してもらったことは意味があったと思います。また学生が参加することで、教員も積極的に参加せざるを得ないという雰囲気になったように思います。他大学でのこの種の催しへの平均的な参加率に比べて、高い参加率であったことはそのことを示しています。学生は、教員が研究者でもあるということに改めて認識し、教員は学生が授業に何を求めているかを知る良い機会になったようです。

今後は、各学科単位で随時このような機会を持つていただくことを期待しています。また、委員会としては、その活動を支援するとともに、全学的なFDとして公開研究授業の開催などを検討して行きたいと考えています。

Close Up Tokiwa

施設紹介

1909年(明治42)11月に、わずか6畳3間と4畳半一間から始まった「小田木裁縫伝習所」から数えて、2009年に開学100周年を迎える学校法人常磐大学。これを記念して、創立者諸澤みよ先生の三十三回忌にあたる本年、その発祥の地の隣接地に「諸澤みよ記念館」が建てられました。

みよ先生の精神と足跡を、先進なデザインで現した記念館。

1909年にささやかに「小田木裁縫伝習所」を開いてから、目まぐるしい社会情勢の変化の中、幾度となく襲った不幸や困難にも、強固な意志と教育への情熱で乗り越え、常に美学と人間教育という教育理念を貫いてきたみよ先生。その素晴らしい軌跡を、さまざまに仕掛けを凝らした展示で、印象深くたどることができる記念館となっています。

記念館の展示コンセプトは、「技術」という言葉をキーワードにしています。これは先生が教育者であると同時に、優秀な「技術の伝承者」でもあったことが、「美学」といっ本学の建学の精神につながっていったからです。

記念館の外観は、先生がご逝去されるまで過ごされた「旧諸澤邸」をイメージし、明るい陽射しが心地よい瀟洒な2階建て洋館建築です。玄関から入るとすぐエントランスホールがあり、1階には2つのギャラリーとラウンジ、2階にも2つのギャラリーがあります。各ギャラリーの入り口には、そのギャラリーを象徴したキーアイテムが飾られた小箱があり、覗くとそのアイテムがおぼろげに浮かんできます。それぞれのスペース毎に雰囲気ガラリと変わり、先進のテクノロジーを使用した仕掛けがコンセプトワードを思い起こさせます。



諸澤みよ記念館

諸澤みよ略年譜



- 1887(明治20)年 茨城県東茨城郡飯富村に、小田木初次郎・はつこの次女として誕生
- 1908(明治41)年 女子共立会3年修了
- 1909(明治42)年 女子共立会裁縫伝習科卒業
- 1913(大正2)年 小田木裁縫伝習所開設
- 1918(大正7)年 小田木裁縫伝習所を諸澤裁縫伝習所と改める
- 1922(大正11)年 水戸市常磐女学校設立認可「校長 諸澤みよ」
- 1935(昭和10)年 水戸常磐女学校の開校式を挙行
- 1944(昭和19)年 常磐高等女学校設置文部大臣より認可「校長 諸澤道之助」
- 1948(昭和23)年 財団法人常磐高等女学校設立認可「理事長 諸澤みよ」
- 1951(昭和26)年 学制改革により総合制の常磐女子高等学校を設立認可「校長 諸澤みよ」
- 1964(昭和39)年 私立学校法により学校法人常磐学園の設立認可「理事長 諸澤みよ」
- 1966(昭和41)年 藍綬褒章受賞
- 1968(昭和43)年 紺綬褒章受賞
- 1969(昭和44)年 常磐学園短期大学入学式(家政科家政専攻)
- 1972(昭和47)年 常磐学園短期大学に幼児教育科設置認可
- 1974(昭和49)年 常磐学園創立50周年記念体育館竣工、記念式典挙行「常磐学園50年史」刊行(水戸常磐女学校設立より起算)
- 正五位勲三等に叙せられ、瑞宝章を授与される
- 諸澤みよ逝去



コミュニティ振興学部教授・学部長
常磐大学FD委員会委員長
伊佐山忠志

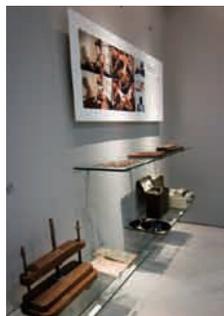
慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程修了。専門：憲法・行政法学。日本公法学会、全国憲法研究会、日本教育法学会会員。



明治時代の日本家屋を演出した空間です。入り口から入り、右側の空間には常磐の原点である「小田木裁縫伝習所」の授業風景を復元。畳敷きの小さな空間には、黒板を使用した当時の授業風景を収めた拡大写真が壁面に貼られ、日本髪を結った女子生徒たち（人形）が机に向かっています。左側の空間には、授業で教材として使われた雛形や型紙などの実物を展示し、当時の服飾教育の実際を伝えるとともに、裁縫伝習所やみよ先生に関わる資料を集中展示し、手に職を持つ大切さを説いた先生の精神に触れる場所になっています。

Gallery 3

**先生の想いや情熱に触れる
みよの精神と実学**



明治時代の日本家屋を演出した空間です。入り口から入り、右側の空間には常磐の原点である「小田木裁縫伝習所」の授業風景を復元。畳敷きの小さな空間には、黒板を使用した当時の授業風景を収めた拡大写真が壁面に貼られ、日本髪を結った女子生徒たち（人形）が机に向かっています。左側の空間には、授業で教材として使われた雛形や型紙などの実物を展示し、当時の服飾教育の実際を伝えるとともに、裁縫伝習所やみよ先生に関わる資料を集中展示し、手に職を持つ大切さを説いた先生の精神に触れる場所になっています。



明治時代の日本家屋を演出した空間です。入り口から入り、右側の空間には常磐の原点である「小田木裁縫伝習所」の授業風景を復元。畳敷きの小さな空間には、黒板を使用した当時の授業風景を収めた拡大写真が壁面に貼られ、日本髪を結った女子生徒たち（人形）が机に向かっています。

明日も先生の遺志を引き継いで
諸澤みよの遺産
みよが築いた
常磐の大樹

みよ先生ご逝去後、その遺志を引き継いだ「現在の常磐」を展示しました。ますます発展し社会と関わり続ける常磐の中に、みよ先生の「実学」と「人間教育」の精神が息づいています。壁面には「精神」と「技術」をキーワードにしたテーマに沿った展示がなされ、中心部分を緑の場として姫が丘の情景を表現しつつ、みよ先生に捧げる生け花をイメージしています。さらに1980年頃から現在までの「見和キャンパスの航空写真」を展示。また、大正時代から常磐の教室で時を刻み続けた大時計を展示し、100年近い歴史を誇る「常磐の象徴」としました。ここは可変可能な空間構成になっていて、部屋全体を企画展示スペースとして活用することができます。

Gallery 4

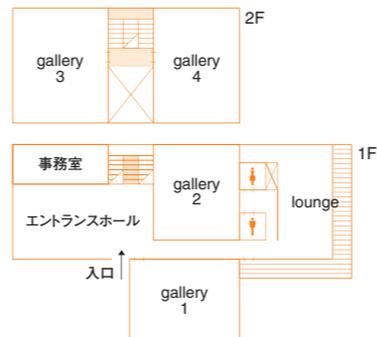


並べて展示された航空写真で現在までのキャンパスの発展が一目でわかる。



大正時代から常磐の教室で時を刻み続けた大時計を展示し、100年近い歴史を誇る「常磐の象徴」としました。

諸澤みよ記念館



床に埋め込まれたメモリアルピースにはみよ先生の愛用の眼鏡や手芸用の糸も。

Entrance Hall

**メモリー・オブ・常磐
エントランスホール**

玄関の扉を開けて一歩中に入ると、「みよ先生の胸像」と「道之助先生のレリーフ」が目に入りま。この空間は、「記憶」という言葉のイメージから、「霧の中に光が灯る空間」を演出しています。壁面をくもりガラスで覆い、間接照明により空間に浮遊性を与え、淡い光の中に「記憶」を封じ込めています。壁には「みよ先生の開学前史」を納め、ホールの床には15センチ角のメモリアルピースを順列よく埋め込み、みよ先生の手作りの品や緑の品々が、学校法人常磐大学の「記憶」を伝えていきます。



Gallery 1

「学問・実学のもつ普遍性」と「みよ先生の強さ」を象徴したものです。また、ここはミニシアターとしての利用も可能です。

**懐かしい思い出のページをめくる
常磐を調べる**

大正から昭和にかけてのハイカラな洋館の書斎をイメージした、「ノスタルジー」を感じさせるアンティーク風な空間です。図書・教科書・アルバム・各種書類などの「収蔵展示」を行っています。来館者がそれらを書棚から自由に取り出し、椅子に座り閲覧することもできるという、ライブラリーとしての機能も持っています。ここに置かれた大きな机は、道之助先生が私邸でお使いになり、その後、幸雄先生がお亡くなりになるまで私邸で実際にお使いになったもの。使い古された優しい木の感触が、先生方を偲ばせてくれます。

Gallery 2



**常磐のあゆみを目と耳で知る
クロニクル常磐**

ギャラリーの正面には3つのスクリーン。年代が描いてある床面に人が立つとセンサーが反応して、その年代の映像が映し出されます。裁縫伝習所から短期大学の開設までが3つの時代に分けられ、貴重な写真などで編集された映像を分かりやすいナレーションと共に楽しめます。年代順に映像を見ていくことで「みよ先生の生涯」と「常磐学園の歩み」がよく理解できます。映像と映像の間には、天星装置が点滅し、夜空に輝く星を幻想的に映し出しています。これは、「学問・実学のもつ普遍性」と「みよ先生の強さ」を象徴したものです。また、ここはミニシアターとしての利用も可能です。

*1

CAMPUS REPORT

中国語を学んで

英語だけでなく、他の言語も学んでみたいと思っていた私は、大学に入って中国語を始めました。中国語は英語に次いで多くの人々に話されている言語なので注目していたという点と、日本語と同じく漢字を使うので学びやすいだろうという理由から中国語を選んだのですが、発音や聞き取りが非常に難しいのです。「ma」という言葉でも、平坦、語尾上がり、語尾下がり、読み方が変わるだけで、意味が全く異なってしまいます。でも、中国語を学んで3年目になりますが、熱心に指導してくださる林 和生先生のお陰で、簡単な文なら訳すことができるくらいまで上達

しました。大学で中国語を学んだ証を取得したいので、今度、中国語検定を受けて、自分の実力を試してみようと思っています。

また、林先生が、中国の楽器・二胡と、日本の楽器・尺八の演奏会の司会者という大役を与えてくださり、中国文化を存分に堪能しつつ、人前で話す訓練ができました。無事役目を果たせた後は、達成感と自信で満ち溢っていました。残り少ない大学生活も、中国語を学び続けていきたいと考えています。そして、本場の中国へ旅行し、中国をもっと好きになりたいと思います。



人間科学部現代社会学科3年
鈴木綾乃

短大生活で得た『宝物』

私は2年間という短い期間で、栄養士としての基礎知識から自分に合わせた専門知識まで幅広く学ぶことができました。

講義だけでなく実習も多く、「給食管理実習」では自分たちが栄養士として献立作成から食材の発注、調理まで責任を持って行います。作ったものを実際に学生や先生たちに食べてもらいアンケートに答えてもらうのですが、いつもドキドキしながら集計しています。そして評価やコメントを見て反省し、みんなと意見交換することによって給食作りの難し

さを改めて実感すると共に自信にもつながりました。

ゼミではラットを使ってインフラボンの効果について研究しています。私はもともと理系の科目が苦手でしたが、短大に入ってから、先生が分かりやすく指導してくれるので安心して活動することができます。おかげで実験が大好きになりました。

常磐短大で過ごした日々はとても充実したものでした。ここで得た知識や経験、大好きな友人たちとの思い出など、すべてが私にとってとても価値のある財産となりました。



短期大学 生活科学科
食物栄養専攻2年
香取友架

Tokiwa News

トキワニュース

常磐大学高等学校と常磐大学幼稚園から届いた最新ニュースを紹介します。

常磐大学高等学校

硬式野球部

茨城県高校野球秋季大会 準優勝 この一年を振り返って… 須田監督に聞く

創部7年目を迎える硬式野球部。共学化にあわせ男子の活動の場として新設された。一期生の部員は18名で、当初は練習場所も定着しないジプシー状態からのスタートであった。初のつくごはかりで周りからの期待も高く早い時点での結果が求められる重圧の中、創生期を過ごした当時の部員たちの土台が実り始めた。2001年に専用グラウンドが整備されると春季大会、夏の大会、秋季大会での戦績が着実に現れ始めた。念願の甲子園出場こそまだ達成していないが、あと二歩のところでまで駒を進める位置に付けている。そんな「常磐の野球部」を創部当初から指導に当たる須田監督にこれまでの歩みを振り返ら

返ってもらった。

Q 関東大会に出場し強豪と戦って何か感じたことはありますか？

須田 他県の代表校が日々の練習をどんな意識で取り組んでいるのかが伝わってきました。「志」が選手の成長と試合結果につながるものなのだというところをつくづく感じましたね。自分自身ではそのことをふまえて指導していたつもりでしたがまだまだでした。

Q チームを育成するうえで大切にしているものは何ですか？

須田 体を動かすのは脳の意識によって動くもの。野球に対する「志」や「意識」はとても重要だと考えます。「意識が変われば行動が変わり、行動が変われば結果が変わる」とは選手によく伝える言葉です。

Q これまでの経験で一番印象に残っていることはどんなことですか？

須田 この6年間で一緒に野球をやってきたOB・OG達すべてが私の宝物です。その年々に思い出はたくさん残っていますが、その中でも、04年の夏の大会、対磯原高戦は忘れられません。初めてのベスト8入りを6点リードで目前にしている8回裏・9回裏の攻撃で、その点差を返されサヨナラ負けをしたゲームでした。このときの経験は一生忘れられません。この経験が今の常磐の原点だと云えます。

Q 自分自身の経験の中で今の指導に生かされているものはありますか？

須田 全てですね。指導者とはある意味、自分自身の経験を選手に伝えるものだと思います。経験は指導と考えます。私自身の経験を常に実践して、日々選手に伝えます。

青年監督として自らが選手の先頭になって引張っていく。選手共々自分自身の努力の積み重ねがまだ継続中であることが感じられた。上を目指す信念で、念願の甲子園出場を勝ち取ってもらいたい。



想いを込めて、一致団結！

これまでの戦績

2003~06年	夏の大会 連続ベスト16
2004年	秋季県大会 ベスト4
2005年	春季県大会 ベスト16
2005年	夏の大会 ベスト4
2005年	秋季県大会 ベスト8
2006年	春季県大会 ベスト16
2006年	秋季県大会 準優勝
2006年	秋季関東大会 初出場(1回戦成田高に敗退)

※夏の大会においては2001年から2006年現在まで初戦敗退なしの記録更新中

ビオトープ作り

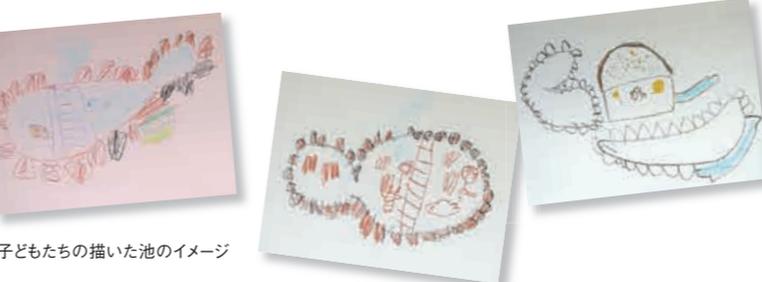


2006年7月に園の遊戯室裏にある『水生植物園』の二つの池の水質検査を常磐大学の先生にお願いして実施したところ、かなりの水質の悪化が見られました。このまま水質の悪化が進むと今までのようにオタマジャクシやドジョウ、ヤゴ、カワナ、ザリガニ、ヨシノボリ、サワガニ等の生き物が棲めなくなる可能性があることがわかり、早急に対策を講じなければならぬと考えました。まず、池の底に堆積した泥を外に出すこと、水生植物を取らないこと、池の石を動かさないこと、

と、取った生き物を池に戻すこと、そして、自然が活動している時期(春から夏にかけての時期)だけに水生植物園に入り、自然が止まっている時期(秋から冬にかけての生き物が冬眠する時期)には、入らないことなどを考えました。そういった対策の中で子どもたちが、「なんですいせいしよくぶつえんにはいれないの?」と言っていました。もちろん説明したらわかってくれましたが、子どもたちは、ザリガニやドジョウを捕まえたくて仕方がありません。それに水生植物園は、園庭や園舎から目

視できない環境なので、教師と一緒に入ってはいけない約束があり、子どもたちからは、自分たちだけで入れる池(?)が欲しい様子がかがわれました。そこで、2006年8月末、夏休み中に園庭南側の花壇のところにビオトープ(池)を作ろうと教師間で相談し、子どもが二期間に登園して来るまでに花壇を掘り起こし水が溜まるような窪みを作りました。そして、二期期を向かえ、如何に子どもたちから自発的にビオトープ(池)を作ろうと言ってくれるのか思案しながらのスタートでした。まずは、年長児が2006年のお泊り会のときに使った流しそうめん用の縦に半分に分けた竹を園庭の花壇のところにセッティングしホースで水を流し、年中児を流しそうめん遊びに誘いました。

流しそうめん遊びは、思いのほか大成功し、9月の残暑も後押しをし大盛況でした。流しそうめん遊びで流れた水が溜まった池(?)での泥んこ遊びへと発展しました。そんな泥水の池を見ていて、タガメやゲンゴロウ、ヤゴ、ザリガニが棲める場所にしたいというのを言い出す子どもが現われました。どうもが現われたい水になるのかを考えている子どもにも「石のあるところは、水がきれいになってるみたいだよ。」とアドバイスをする、「じゃあ、もっと掘ってみよう。」と言い出し、掘ってみると土の下は砂、砂の下は石となっていました。掘った土や砂、石を池の周りに山のように積んでおくとその山(土手)で土手すべりをして遊ぶ子ども、池を飛び越えて遊ぶ子どもなど様々な遊びが展開しました。そんな中、池のイメージをクラスで絵にして表現しました。



子どもたちの描いた池のイメージ



ビニールシートの池は失敗に...



みんなで楽しんだ流しそうめん遊び

しまい溜まることはありませんでした。池の底にシートを敷いて水を溜めようとしてもシートだけでは、水が洩れてしまいました。10月に入り、今度は、ビニール製のゴミ袋を9枚張り合わせて大きなビニールシートを作り、シートの上にビニールシートを敷いて水を溜めました。ビニールシートが滑ってしまったので、杭と大きな石でビニールシートを留めました。石が滑つて中に落ちてしまうので、大きなネットも重ねて敷いてみました。

しかし、次の日には、水は地面に吸い込まれてしまい、予想通りに溜まることはありませんでした。やはり、本格的に池(ビオトープ)作りをしないとダメだという結論に達しました。10月中旬になり、今度は一番下にビニールシートの穴あき防止のためのじゅうたんを敷き、簡易用水路を作るための大きなビニールシートを購入し、それを敷いて、周りに土手を作り、土手の外側までじゅうたんを敷き、それを土と大きな石で固定し完成しました。そんな折、ひとりの年中児が池の南側の土手の上の方から湧き水が出ていることを発見しました。園長とともに例の流しうめんのときの竹を使い湧き水を池に引くことに成功。

約2ヶ月かかってやっと完成まで至りました。何度も失敗する中で子どもたちは、たくさん遊びを創造し、たくさん工夫をし、試行錯誤を繰り返して多くの学びを得ることができたと思います。ようやく完成に至り、今度は何を池(ビオトープ)で飼えるのか、ワクワクしている様子が伝わってきました。まずは、年中組で飼っていたザリガニを4匹その池に放しました。しかし、4匹ともカラスか何かの生き物に食べられたのか、残骸が池の中にありました。子どもたちは、隠れる場所がないのがいけないんだとか、タカシ?(カカシ)を置いたほうがいいのか、黄色いテントを張ったほうがいいのか、いろいろな対策を考えてくれました。そんな折、おやじの会のお父さまたちが『水生植物園』の泥さらいをしてくださり、そのときに捕まえたドジョウ3匹とヨシノボリ2匹を池に放してくれました。そして、古い植木鉢や竹の筒などを隠れ場所として池の



中に作ったりしました。また、年中児の男の子のお兄ちゃんが川で捕まえてきたというザリガニとタニシを池に入れたり…。このあと、また、どんな生き物を入れて育てるのか考え、毎日のように覗き込みながら、日々の発見を楽しんでいるようです。

ビオトープとは...

ドイツ語で生物が住む生態系・環境を意味する。環境問題や教育などの分野では、生物の生息地としてより自然に近い形で人工的に作られた池や河川を示すことが多い。